

金心寺〈こんしんじ〉と弥勒菩薩〈みろくぼさつ〉（三田市丸岡）

今から、千三百年も昔のことではありますが、定慧上人〈じょうえいしょうにん〉といってとても偉〈えら〉い坊さんがありました。三田に金心寺という大きなお寺を建てました。

その広さは、三田の屋敷町〈やしきまち〉から三田小学校、有馬高校にまたがっていたらしく、三田小学校の横の御池〈おいけ〉は、金心寺の蓮池〈はすいけ〉であったということでもあります。七堂伽藍〈しちどうがらん〉のととのった寺で、寺坊〈じぼう〉が二十何か寺〈じ〉あったといひます。



三田の光明寺もその寺坊の一つであったのです。今日そのままこの寺が残っていたら、日本でも指折りの大きな寺であったであります。戦国の時代に、寺には荒木村重〈むらしげ〉というえらい大將が陣取っていたが、信長の家来〈けらい〉の明智光秀〈あけちみつひで〉はこの寺に火をつけて焼きました。寺は紅蓮〈ぐれん〉の火に包まれて焼かれたが、信心〈しんじん〉深い坊さんや村の人びとは、この火焰〈かえん〉のなかをくぐってご本尊〈ほんぞん〉の薬師如来〈やくしにょらい〉と、弥勒菩薩を救いだしてそのそばの御池に沈めました。

この戦乱〈せんらん〉がすんでから、池の底〈そこ〉に沈んでおられる尊師如来と、弥勒菩薩とを救〈すく〉い出して小さいながらに新しいお堂を作ってそこにおまつりしました。

明治のはじめになって、屋敷町にあった金心寺を今日の天神丸岡の地に移しました。これが今日伝〈つた〉わっている金心寺であります。

この弥勒菩薩は、国の重要文化財〈じゅうようぶんかざい〉であります。昭和七年に少し破損〈はそん〉しているので修理をしました。その時その胎内〈たいない〉に字が書いてあるのが発見〈はっけん〉されました。むかし、御池〈おいけ〉に難〈なん〉をさけられたときについた泥がそのまま残っていて、字ははっきりと読みにくいが、

「この金心寺に敬田〈けいでん〉、恩田〈おんでん〉、悲田〈ひでん〉の三田〈さんでん〉をおく。」と書いてありました。三田〈さんだ〉という地名は、ここから起ったのであろうといわれています。

今でも、弥勒菩薩の坐像〈ざざう〉の半分下には、むかしのままの御池の泥がついて、戦乱のはげしかった日のことを物語っているようであります。



- 金心寺弥勒菩薩（重文）

高さ1メートル53センチ、坐像

白雉〈はくち〉元年（六五〇年—奈良時代前期）

漢山口直大（アヤのヤマグチのアタイタイコウ）と言う仏師の作、この仏師は法隆寺の四天王像を彫刻していて有名である。